

命を預かる

三年 大橋 凜

(どうしてももっと遊んであげなかったのだろうか…。どうしてもっと早く気づいてあげられなかったのだろうか…。どうして…。)

たくさんの後悔が残ったあの日、私は改めて命の尊さを感じた。

『ペットをお迎えする』それは、とてつもない喜びと希望であふれることだ。誰しもが最初に(この子を最後までしっかりとかわいがろう。後悔をしないように育てよう。)と思うはずだ。しかし実際、ペットとのお別れで、後悔が残る人は、私も含めて非常に多いのではないだろうか。

ペットを亡くしてしまった飼い主の、約七十パーセントが、ペットと別れる前の向き合い方に後悔がある。このようなデータが存在している。やはり、ペットと後悔なしでお別れできる人の方が少ないのだ。では、どうしたら後悔を少なくできるのだろうか。

私の家では『ライム』という、チンチラを飼っている。ついこないだ、一才の誕生日を迎えたばかりの、まだまだ小さくてかわいい子だ。そして、ライムをお迎えする前にも『ラッタ』という、チンチラを飼っていた。

数年前から少しずつ『チンチラブーム』が起き始めていたこともあり、私は(チンチラを飼ってみた)と思うようになっていた。そして私が小学六年生の時、念願であったチンチラ、ラッタをお迎えしたのだ。絨毯よりもフワフワな毛。愛くるしい瞳。ラッタの全てのとりこになった。しかし中学生になった私は、勉強と部活で忙しくなり、ラッタと遊ぶ時間が減ってしまった。

そんなある日に、ラッタは突然死してしまった。ラッタの異変に気がついたのは夜中の十一時。もう呼吸をすることで精一杯、あまりにも気づくのが遅すぎたのだ。

この一件以来、何をするにも後悔が付きまとい続けた。しかしそんな時に、ライムに出会った。また同じことが起きてしまいそうで怖かった私は、一度は飼うことをあきらめたけれど、それでも家族とたくさん相談し、またお迎えすることに決めた。

命とはとても尊いものだ。そんな尊い命を私たち飼い主は預かり、共に過ごすのだ。また、動物は飼い主を選べない。だからこそ、まずは私たちが、後悔の少ない飼い方をする必要があると思う。特別高価なおもちゃを買ってあげたり、常に一緒にいたりする必要はない。一緒に遊べる時間を見つけ、愛情をたくさんたくさん注ぐ。これだけでも、後悔は少なくなるはずだ。

これからも、ライムと過ごす限りある時間を大切に、後悔の少ない飼い方をしたい。そして(この家族に出会えてよかった)とライムに思ってもらえるようにしたい。